様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２５４２

研究課題名（和文）15世紀西地中海海域世界のなかのナスル朝社会：陸と海の資史料統合研究

研究課題名（英文）Nasrid society and the Western Mediterranean World in the 15th Century: maritime and terrestrial relationships

研究代表者
黒田　祐我（KURODA, YUGA）

神奈川大学・外国語学部・教授

研究者番号：５０５８１８２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：複数の信仰共同体と文明が交流を繰り返した中世後期「西地中海圏」の研究は、西洋史・イスラーム史双方に分断されてきた。本研究は双方の成果をふまえながら、アラビア語史料の残存状況が著しく悪く、その実像が不明瞭なナスル朝グラナダ王国社会を、陸路と海路による近隣諸国との交流の結果残された諸史料（カスティーリャ王国・アラゴン連合王国・ジェノヴァ・マグリブ）から照射するための第一歩である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、民族・文化・宗教が混交を繰り返した前近代の地中海世界も実態解明を目的としている。今現在、世界各地で衝突と分断を引き起こしている三大一神教（ユダヤ教・キリスト教・イスラーム）は、かつてもそうであったように即断されているが、実のところ、前近代世界では、そうではなかった。中世地中海の人々の生き様を史料から再現し、来たるべき多様な社会の構築において示唆を与えることを目指す。

研究成果の概要（英文）：The historical interpretation on the "Western Mediterranean region" of the late Middle Ages, where multiple religious communities and civilizations interacted with each other, have been divided between those of European History and Islamic Studies. This project is the first step toward shedding light on the Nasrid Kingdom of Granada, whose society is unclear due to the extremely poor state of surviving Arabic-language sources, from the various Western European sources (Christian kingdoms in the Iberian Peninsula such as Castile, Aragon; City-State of Genoa) and Maghribian sources that have survived as a result of various exchanges by land and sea.

研究分野：西洋中世史

キーワード：地中海　スペイン　グラナダ　異文化交渉

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中世地中海は、北のキリスト教諸勢力（後の西欧文明の中核地域）と南のイスラーム諸勢力が鬩ぎあう舞台であった。代表者がこれまで研究対象としてきたイベリア半島のカスティーリャ王国に軸足を置きながら、「西地中海圏」という広域世界で、信仰や文明を超えてどのような交流が行われていたのかを把握するための基礎的な史料情報を特定する必要が生じた。そして、この海域圏の交流の結節点となるナスル朝社会の実態を把握することが鍵となると判断し、本研究計画を構想するに至った。

２．研究の目的

中世の西地中海圏においては、文明圏を超えて政治外交関係、軍事衝突、交易、人的・知的交流が展開していたことは間違いない。しかしナスル朝グラナダ王国をめぐって展開した諸交流の実態は、とりわけ不明瞭なままである。全体として史資料が少なく、社会の実態解明が進まない同王国研究の中でも、とりわけ 15 世紀は「暗黒時代」といえる。「西地中海圏」でのキリスト教諸勢力とイスラーム諸勢力とのあいだを仲介した同王国社会の内実を把握するため、本研究は以下の二点の目的を設定した。

(1) 陸路での諸交渉（ナスル朝領域とカスティーリャ王国領域との間の「境域」諸交渉）の実態把握
(2) 海路での諸交渉（マグリブ・イフリーキヤ、イタリアとの間の諸交渉）の実態把握

この(1)(2)双方の視角から、中世後期、とりわけ 15 世紀ナスル朝グラナダ王国が、西地中海圏において果たしていた歴史的役割を浮かび上がらせようとした。

３．研究の方法

先に指摘したように 15 世紀のナスル朝社会自身が直接的に残した証言は極めて少ない。しかしながら、近隣諸国、とりわけイベリア半島のキリスト教諸国、そしてイタリアのナスル朝との関係を維持していたイタリア海洋都市国家ジェノヴァの史料を分析することで、いわば陸と海双方の史料を突き合わせて、ナスル朝社会の実態の一端に迫ろうと試みた。

４．研究成果

本研究計画を実現するため、南欧諸国（スペイン・イタリア）とマグリブ諸国（モロッコ・チュニジア）に残存する資史料の調査とともに、現地研究者との情報交換を当初想定していた。しかし現地への渡航と古文書館調査がコロナ禍により不可能となったため、大幅な研究計画の見直しを余儀なくされた。第一の変更点は、対象とする時期の拡大である。当初は 15 世紀に限定することを想定していたが、これをナスル朝が君臨した時代全体［中世後期（13 世紀後半～15 世紀）］に拡大し、最新の研究状況の把握と刊行された史料の網羅的再検討を行った。第二に、「西地中海圏」に関連する研究を実施している日本人研究者らとの意見交換を重視した。

(1) 陸路で繋がっていたナスル朝社会の実態

主に研究代表者の専門であるカスティーリャ王国に関連する叙述・文書史料の情報を整理するなかで、ナスル朝をはじめとするアンダルスと近隣諸国との諸交渉について、以下の 3 点の分析を行った。

①国家間レヴェルの諸交渉の事例：外交と軍事

中世盛期（11 世紀～）、イベリア半島のキリスト教諸国は、アンダルスと戦争を行うばかりではなく、複雑な外交関係も維持していた。アンダルスの君侯らを封建的家臣として遇するというフィクションを伴いながら、信仰の異なる者同士の和平あるいは同盟の構築を可能としたのである。中世後期のナスル朝グラナダの君主とカスティーリャ王との関係も、この擬制的封建主従関係を土台として、異教徒勢力との休戦・和平・同盟が容認されていた。ボルゴーニャ朝期（～1369 年）のカスティーリャ王は、ナスル朝君主に対して臣従関係を強要する場合が多く、和平協定の条項内には封建的義務（従軍・身分制議会出席）を伴うことが多いものの、トラスタマラ朝期の諸王ら（1369 年～）は、対グラナダ政策が優先されなくなるのに伴って、単純な休戦となることも多い。両王朝の対ナスル朝政策の差異について、そして当のナスル朝君主と同社会がこの和平関係をどのように認識していたのかについて、さらに検討する余地がある。

また軍事・外交関係の刊行文書の整理に伴い、戦争の結果として征服された都市拠点の降伏をめぐる状況についても新たに分析を行った。結果明らかとなったのは、降伏の際に取り交わされる協定文書の条項内容が、11 世紀のトレード征服（1085 年）からグラナダ征服（1492 年）に至るまでほとんど変化がないという事実である。

②地域間レヴェルの諸交渉の事例：「境域都市」における暴力と和平維持
　アンダルスと陸路で境を接する「境域（フロンティア）」とは、当然ながら越境暴力（局地的な略奪や誘拐、そして殺害）が遍在する場であったが、と同時に、越境して「敵」と交易を行い、損害の補填や捕虜交換をめぐる局地的外交関係が展開する場でもあった。このような中世盛期から中世後期に至る「辺境都市」の住民が作る社会の両義的な特質を概観するとともに、15 世紀のカスティーリャ辺境都市ヘレス・デ・ラ・フロンテーラ、ハエン、カソルラを事例として、ナスル朝領域とのミクロな交渉模様を未刊行史料を使いながら分析した。「境域」でのミクロな陸上交易についての存在が、とりわけ興味深い。収集された史料を用いて、さらに研究成果の公表を予定している。
　また、辺境都市の日常であった誘拐や略奪行為の結果として発生する捕虜や奴隷といったマージナルな存在の境遇と、彼ら／彼女らの解放へと至るプロセスをめぐる史料収集と研究動向の整理を行った。今後は、本テーマでの研究も進展させる予定である。

③双方向的な文化変容（補足的な研究成果）
　先の①で検討した都市の征服に伴って、かつてのアンダルス都市がどのような景観の変化を被ったかについて分析した。都市の開城降伏の後、まずキリスト教のイスラームへの勝利を可視化するために、町の中心に位置する大モスクの教会への転用儀礼が従軍聖職者によって主宰された。こうしてアンダルス時代の遺構は残されたものの、その理由はしばしば喧伝される「宗教的寛容」によるものではない。イベリア半島のキリスト教諸勢力は、アンダルスの都市空間を自らのイデオロギーに利するかたちで組みなおした。とはいえそれでも、アラビア語や、いわゆるイスラーム建築に対する嫌悪感などは中世においては見られず、結果としては地中海的なハイブリッド建築文化が残存することとなった。
　これとは逆にナスル朝宮廷でもアルハンブラの「諸王の間（Sala de los reyes）」の天井には、マグリブ・アンダルスでは非常に珍しい人物画が描かれており、西欧の中世騎士道や君主鑑（君主教育手引き書）といった題材と深く関連している。「文明間の対話」は、宗教教義や政治的な次元とは別枠で、双方向的に生じていたのである。

(2) 海路で繋がっていたナスル朝社会の実態
　ナスル朝グラナダ王国と海路で交流を繰り返したマグリブ、イベリア半島のアラゴン連合王国、そしてイタリアのジェノヴァの研究状況と刊行史料の分析から、以下の点が明らかとなった。

①マグリブ諸王朝との関係の推移
　ムワッヒド朝が瓦解する 13 世紀、キリスト教諸国とナスル朝、そしてマグリブとのヒト・モノ・情報の共有が本格化した。他の科研共同研究［研究課題番号 22K00955］［研究課題番号 21H00586］と連動させながら、まずカスティーリャ王フェルナンド 3 世期からアルフォンソ 10 世期（1217～1284 年）におけるマグリブ諸王朝との政治・外交関係の整理を行った。ナスル朝はカスティーリャと先述した臣従関係を可能な限り維持しつつも、マグリブのマリーン朝・ザイヤーン朝・ハフス朝との間で多彩な軍事外交的駆け引きを行い、自らの支配領域の保全と拡大に努めていたことが再確認された。さらにナスル朝、カスティーリャ双方の国内では王族・貴族・都市を巻き込んだ内乱状況においては、各々の思惑に則って複雑かつ宗教的差異を超えた合従連衡を繰り広げていたことも浮き彫りとなった。今後は、これにアラゴン連合王国の関与状況の分析結果を加え、ナスル朝とジブラルタル海峡をめぐって展開した「海峡戦争（1252～1350 年）」の実態を分析する必要がある。

②イタリア都市国家ジェノヴァとの関係の推移
　イタリア半島の海洋都市国家ジェノヴァは、中世盛期から既にマグリブ・アンダルスの諸政権と協定を締結して通商関係を維持していたが、ナスル朝との関係は、より緊密化した。13 世紀後半から和平協定を通じてナスル朝と友好関係を持ち続けたが、とりわけ 14 世紀後半から 15 世紀にかけて、「海峡戦争」の終結後、両者の関係が蜜月関係となったことが確認できた。これに伴い、ジェノヴァ商人の居留街区がナスル朝領域の地中海沿岸沿いから内陸の都グラナダにかけて形成された。ナスル朝が 15 世紀に極度の政治的混乱を経験しながらも 1492 年まで延命することができた背景には、ジェノヴァの政治的・経済的後押しがあったからだと考えられる。
　彼ら滞在ジェノヴァ商人が残した書簡と帳簿を用いて、ナスル朝社会の社会経済状況を解明する研究がスペインのグラナダ大学を中心に進められているが、今後はその成果を吸収しながら、ナスル朝社会の実態把握に繋げる必要があろう。

③双方向的な文化変容（補足的な研究成果）
　ナスル朝グラナダとジェノヴァとの蜜月関係が明らかとなったが、ちょうどこの時期（14 世紀後半）に先述したアルハンブラ内の人物画が作成されていることからも、陸路ではカスティーリャが、海路ではジェノヴァが仲立ちとなって、「西欧文化」との接触が常態化したと想定される。逆にジェノヴァはナスル朝領域内で生産される奢侈品（砂糖・乾燥果実・絹糸）を西欧世界に供給する役割を果たし、「オリエンタル」な産品が多くもたらされることとなった。ナスル朝グラナダ王国もそこに包摂されている「西地中海圏」全体の交流史は、これまでの「西欧文化対

イスラーム文化」という図式を超えた世界像を示してくれている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 黒田祐我	４．巻 724
２．論文標題 「レコンキスタ」における降伏文書	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史と地理―世界史の研究	６．最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 瀧本佳容子，黒田祐我，押尾高志，久米順子，鎌田由美子	４．巻 54
２．論文標題 慶應義塾図書館所蔵アルフォンソ10世関連写本ファクシミリ版二作品解説―『聖母マリアの古謡集』および『チェス、さいころ、盤上ゲームの書』―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日吉紀要　言語・文化・コミュニケーション	６．最初と最後の頁 75-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒田祐我	４．巻 36
２．論文標題 中近世地中海の捕虜/奴隷,そして彼らの解放をめぐる研究状況	５．発行年 2022年
３．雑誌名 スペイン史研究	６．最初と最後の頁 23-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 黒田祐我
２．発表標題 13世紀西地中海圏における捕囚の実態 ―捕虜解放に関する奇蹟譚の分析―
３．学会等名 第25回拡大地中海史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 黒田祐我
２．発表標題 イベリア半島の騎士修道会をめぐる歴史と議論
３．学会等名 修道会史研究ネットワーク2019年度第1回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 黒田祐我
２．発表標題 中世西地中海海域におけるイベリア半島―研究の現状と課題
３．学会等名 第23回拡大地中海史研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計7件

１．著者名 甚野尚志、岸田菜摘、毛塚実江子、白川太郎、高橋謙公、大塚将太郎、渡邉裕一、皆川卓、黒田祐我、竹田千穂、高津秀之、齋藤敬之、林賢治、三浦清美、武田和久	４．発行年 2021年
２．出版社 知泉書館	５．総ページ数 364
３．書名 疫病・終末・再生：中近世キリスト教世界に学ぶ	

１．著者名 F. Alfieri, G. Ciappelli, S. Ferente, A. Hirayama, M. Ishiguro, T. Jinno, Y. Kuroda, V. Lavenia, T. Minagawa, K. Takeda, D. Tonelli	４．発行年 2021年
２．出版社 De Gruyter Oldenbourg	５．総ページ数 200
３．書名 Christianity and Violence in the Middle Ages and Early Modern Period: Perspectives from Europe and Japan	

１．著者名 神崎忠昭、長谷部史彦編、黒田祐我、他16名	４．発行年 2021年
２．出版社 慶應義塾大学出版会	５．総ページ数 332
３．書名 地中海圏都市の活力と変貌	

１．著者名 DIANA ARAUZ MERCADO, CECILIA BAHR, MIEKO KEZUKA, JUNKO KUME, YUGA KURODA, MARTIN F. RIOS SALOMA, GERARDO RODRIGUEZ, FLOCEL SABATE, SARA SATOH, MARIANA ZAPATERO	４．発行年 2019年
２．出版社 Tokyo University of Foreign Studies-Institute for Global Area Studies	５．総ページ数 140
３．書名 Beyond the Seas: A Medievalists' Meeting in Tokyo	

１．著者名 飯田巳貴，西村道也，宮崎和夫，黒田祐我，櫻井康人，堀井優，佐藤健太郎，高田良太，澤井一彰	４．発行年 2019年
２．出版社 リョーワ印刷（東京）	５．総ページ数 158
３．書名 中近世地中海史の発展的研究 ： グローバルな時代環境での広域的交流と全体構造 ： 科学研究費成果報告書	

１．著者名 立石 博高、黒田 祐我	４．発行年 2022年
２．出版社 河出書房新社	５．総ページ数 160
３．書名 図説スペインの歴史	

１．著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、冨谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 292
３．書名 ヨーロッパと西アジアの変容 11～15世紀	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関